

自閉症教育プロジェクト事例研究会

8月4日、上記事例研究会が豊中市教育センターにおいて開催されました。90数名と会場は満員で、参加者の自閉症児者への具体的支援についての関心の高さが感じられました。自閉症の子どもが絵や写真や文字を多用した視覚グッズや環境等の整備工夫（構造化）や、まわりの人間による特性の理解（受け入れ）等により、日々の生活や学習に見通しが立ち、安心感を持って集団の中であっても生き生きと適応していけることはかなり広く知られてきています。今回は、自閉症の子どもへの実際の取り組みにおいて、そういったグッズをどううまく活用していくか、またどんなニーズを掘り起こしていくのか、それをどう引き継いでいくのか等について、高槻市立第九中学校 石井幸子先生、堺市立百舌鳥養護学校 川野広美先生と、東大阪市立成和小学校 高畦真理子先生から報告がありました。そして自閉症児者の支援のエキスパートと言えるアクトおおさか所長 新澤伸子先生と、市立豊中病院小児科医師 松岡太郎先生からの助言がありました。

自閉症の子どもへの不安を取り除く工夫、環境をわかりやすくして自分から動けるようにし、お仕事に取り組めるようにすることや、なかなか難しい性教育やマナーへの取り組みなど、会場から「なるほど」という声がたくさん聞こえてきました。使われているグッズも個々に使いやすくアレンジしてあり、微笑ましい印象がありました。（文責 書記藤岡）

<参加者の感想>

本当にわかりやすく視覚的な指導をなさっていると頭が下がる思いで聞かせていただきました。小中の連携もうまくいっていて、スムーズに中学校生活に馴染んでいっているように感じました。しかし、小学校と中学校では教科制、時間割変更は多々ある等、違いがたくさんあると思いますが、そのあたりも質問すればよかったなと反省しています。絵ももっと利用してみようと思いました。データをとり、こんな時・・・とはわかるのですが、通常学校での周りの生徒の理解が得られなかったり、他の養護学級生徒もいて、なかなかマンツーマンで指導対処できないのが、現実的悩みです。マンツーマンできなくても、できる指導を考えなくてはなりませんよね。

